

李登輝版「台湾紀行」第二弾の台南・嘉義編にカメラマンとして随行

## 李登輝元総統が「台湾一周の旅」

理事・台北事務所長

早川

友久



農家の人々と談笑する李元総統  
(5月16日、台南市後壁区菁寮村)

李登輝元総統は、旧友を訪ね、各地の産産を視察することなどを目的に「台湾一周の旅」を開始、四月十八日から二十日にかけて屏東県と高雄市を訪問された。順次北上し、夏くらいまでに、台湾を一周される予定だという。

五月十六日からは第二弾として台南と嘉義を視察。今回は、本会理事で台北事務所長の早川友久氏がカメラマンに任命されて同行した。  
(本誌編集部)

### 蘭や稲田を視察「5月16日」

四月末に行われた第十七回・日本李

登輝学校台湾研修団でのこと。李登輝学校を運営する群策会の王燕軍秘書長から「来月、総統の南部視察に随行するか」と聞かれ、即座に「連れて行って下さい」とお願いした。

それに先立つこと二週間ほど前の四月十八日から、李登輝元総統は「南部ホームステイ」と銘打って、屏東や高雄の視察に赴かれていた。その際の報道で、引き続き台湾各地をめぐる「台湾一周の旅」が計画されているとは聞いていたが、翌月には次の視察に向かうとは思ってもいなかった。李元総統は、大腸癌によって昨年十一月に開腹手術を受けたばかりなのである。

とはいえ、李登輝版「台湾紀行」にお伴するのは願ってもないこと。カメラマンとして随行することになった。今日はその一日目である。

李元総統は台北発十三時三十六分の台湾高速鉄道(台湾新幹線)に乘車、嘉義へと向かう。南部視察には台湾のメディアも同行取材している。

十五時ちようどに嘉義駅へ到着。今回の南部視察には、本会の台湾側カウンセラーパートナーである李登輝民主協合理事の張榮湛さんが台北から同行。張さんは元台南市長である。嘉義駅から車で移動し、まずは「台湾蘭花科技園区」内にある「東方蘭花事業集団」

を視察する。

園区では、頼清徳・台南市長、頼美恵・台南市議会議長、黄崑虎・元総統府国策顧問らがお出迎え。しばし談話の後、東方蘭花事業集団の責任者、林明星さんの案内で蘭を栽培している温室の見学に向かわれた。

その後、台南市後壁区の菁寮村を訪問、黄崑濱さんを訪ねた。前出の黄崑虎さんと一字違いだが、縁戚関係はない。黄崑濱さんは二〇〇四年に公開さ



嘉義駅から東方蘭花事業集団に直行して蘭栽培の温室を視察（5月16日）

れた米作に従事する農民の日常と苦勞を描いた台湾映画「無米粟」のモデルになった人である。

ご自身も農学博士だけに、常人よりも農業への想いは深い。話は農業、特に米のことに終始したが、総統の口からは烏山頭ダムを築いた八田與一、蓬萊米の父と呼ばれた磯永吉と母と呼ばれた末永仁など、日本時代に台湾の農業に大きく貢献した先人たちの名前が多く挙げられた。

その後、菁寮老街を三十分ほどかけて散策。元総統が、おらが村に来るということで、まるで村じゅうの人々が集まったかのような騒ぎであった。夕方からは、地元の農民たちに向かって演説。百人ほどの農民が押しかけた。

「四十年前、一人が年間に食べる米の量は約一三五キロだった。現在は三〇キロにも満たない。若い人たちがダイエットのあまり、米を食べないため、米の販路が狭まってきている。稲作を他の方法と組み合わせることはできな

いか。もし観光と農業を組み合わせることができればなら、農業にとって新たな道が開けるだろう」と述べ、映画「無米粟」によって人気の観光老街となった菁寮の街にエールを送った。

また、昨今の物価上昇によって生活に影響が出ることについて「街へ出てデモをしたっていいじゃないか。それが民主主義というものだ」と述べ、国民が声を挙げることを望んだ。

演説後、近くの有機栽培の稲田を見



頼清徳・台南市長(左)の案内で市内後壁区にて有機栽培の稲田を見学（5月16日）

学。さすがに農学者らしく、大きく関心を持った様子で農民の説明に熱心に聞き入っていた。

夜は十八時半から、台南市長・台南市議会議長共催の歓迎宴に出席。出席者からサインを求められたり、写真に収まるなど、忙しい一席となった。

宴席も終わり、今日のスケジュールは終了。李元総統は血色も良く、演説も以前にも増してパワフルで、開腹手術から数ヶ月とは思えないほどの復活ぶりだった。今後、一連の視察を通じて「李登輝復活」がアピールできればこの上ないことだろう。

今宵、一行は台南市柳営区の南元レジャー農場に宿泊。明日は烏山頭ダムを見学後、嘉義市内に移動する。

## ■烏山頭ダムなどを訪問「5月17日」

南元レジャー農場で台南・嘉義を視察する旅の二日目を迎えた李元総統は八時過ぎに起床。園内を巡るカートに乗車し、一周しながら朝食会場へ。た

くさんの植物が植えられた園内を周る光景は、四年前に沖繩を訪問した際、東南植物園を同じくカートに乗りながら見学したことを思い出す。

楓カフェと名付けられた朝食会場からは、眼下に豊かな植生を見ながら食事をするができる。前日に引き続き、黄崑虎氏らとともに朝食。

午前十時からは同じ会場を使って、今回の視察に同行したメディア限定の記者会見を開催。次々にメディアからの質問が投げかけられるなか、一つ一つの質問に丁寧に答えていった。質疑の中で、李元総統は五月二十日の総統就任式に招待されているものの「私は出席しないほうがいいだろう。今回の選挙は時期を早めすぎた」などと答えられた。

一時間ほどで記者会見は終了。休憩後、十二時から園内のレストランで地元名士を招いた昼食会が開かれた。台湾団結聯盟の黄崑輝主席なども駆けつけ、賑やかな昼食会となった。



宿泊した南元レジャー農場では園内を巡るカートに乗って朝食会場へ（5月17日）

実はこの南元レジャー農場は、烏山頭ダムから車で十五分ほどの距離。なるほどシャワーの水の勢いも良かったわけだ。

李元総統は午後二時過ぎ、烏山頭ダムへ向けて出発。「烏山頭区管理处」へ到着すると、嘉南農田水利会の楊明風会長らが出迎え、台南県長や外交部長（外務大臣）をつとめ、現在は立法委員（国会議員）の陳唐山氏も駆けつけた。



烏山頭ダムでは同行メディアに台湾農業を一変させたダムの意義を即席でミニ講義（5月17日）

パワーポイントを使ったダムの概要説明に熱心に聞き入ったあと、二階のバルコニーから「珊瑚潭」とも呼ばれる烏山頭ダムを眺める。そしてカメラを構えるメディアに対しては、このダムがいかに台湾の農業を一変させたかについて即席のミニ講義。

その後、車で八田與一の銅像へ向かう。ちょうど日本人観光客が見学に訪れており、突然の李元総統の登場にビツクリした様子。八田の伝記を読んで

ダムの見学に来たとか。

銅像に献花後、記者のぶら下がりに答えた李元総統は「八田は終戦前、フイリピンに向かう途中に船が撃沈されて亡くなったんだ。終戦後、台湾にいた日本人は日本に帰らなければならなくなつたが、奥さんはそれをよしとせず、ご主人の作つたダムに身を投げたんだ。以前、慶應大学の講演に招かれた時に八田のことを話そうと思つたんだが、行けなかつた。そうしたら、産経新聞がその原稿を一面に載せたんだな。八田與一という人は日本精神の代名詞みたいな人だよ。そう話す李元総統の声は時々くぐもつていた。

車に乗り、ダムを離れる直前、同行の張榮藻さんが指差した先にあつたのは日本から送られた「絆の桜」。久しぶりに訪れたという烏山頭ダムに、感慨深げの様子だつた。

台南を離れた一行は続いて嘉義へ。嘉義市内にある二二八記念公園では黄敏恵市長がお出迎え。嘉義は市長も県

長（知事）も女性という、台湾版「かあ天下」の街である。

園内の記念館では「関鍵一九八七（鍵は一九八七）」と題された展示会が開催されている。一九八七年、戒厳令は解除されたものの、まだまだ民主化にはほど遠かつた台湾社会で人々が声を上げ始める「鍵」となつたのがこの年である。翌年一月、蔣経国総統の死去により、李登輝副総統が総統に昇格し、以降十二年の在任期間を通じて、少しずつ民主化へのスピードが加速していったのである。

見学後、休憩室でしばし黄市長らと歓談。

続いて、市内に芸術家の呂勝南氏が主宰する「呂勝南交趾陶工作坊」を訪問。呂氏からは地元嘉義で伝統芸術の陶芸作品を作り出すだけでなく、啓蒙活動にも従事しており、李元総統の健康と長寿を祈る作品が贈られた。工房には、総統在任中に呂氏へ贈られた勳章や賞状などが飾られていた。

今日は朝から台南も嘉義も降ったり止んだりの雨模様だったが、不思議なことに李元總統が屋外へ出るときには雨が止む。実際、昼食会が始まるとどしゃ降りの雨だったのだが、まもなく出発されるといふ頃になると晴れ間が出て来たのだ。

呂氏の工房を辞去した一行は一旦ホテルに投宿。休憩後、張花冠・嘉義縣長主催の晩餐会に出席するため、嘉義県太保市の嘉義県長公館（公邸）へと向かう。渋滞する平日夕方六時ごろの出発で、市内からは通常一時間ほどかかるが、一行はバトカー先導のノンストップのため三十分で到着。

公館では張縣長や余政達・県議会議長らが出迎え、瀟洒な応接間で歓迎の言葉を述べた。張縣長からは阿里山のお膝元らしく、大きな檜のオブジェの贈り物。「永遠の民主化の父」と銘が入っていた。李總統の時代に台湾が大きく民主化を進めたことに対する最高の賛辞だろう。

和やかな雰囲気の中で一時間半ほどの晩餐会を終えて宿泊先のホテルへと戻り、午後九時前に公式の日程は終了した。

明日は午前から嘉義県内の農場や養護施設などを視察、夕方に台北へ戻ることになっている。

## 木耳農場などを視察「5月18日」

本日は台南・嘉義視察の最終日。嘉義市内の耐斯王子大飯店で朝を迎えた李元總統はホテルを十時過ぎに出発。

見送りのため、ロビーに整列して迎えたホテルスタッフとにこやかに握手してお別れの挨拶。

車列は嘉義市を出て嘉義県中埔郷頂埔村にある「彦廷農場」へと向かう。

市街地を抜けるとすぐに緑豊かな田畑の風景が広がり、南部に来たことを実感させてくれる。

二十五分ほど走って農場へ到着。昨夜、歓迎の晩餐会を主催した張花冠・嘉義県長もここから合流。



張花冠・嘉義県長も合流し、彦廷農場において機械化されたキウラゲ栽培を視察（5月18日）

こちらの農場では有機栽培と最先端の科学技術を組み合わせ、最新の木耳栽培が行われている。工場と見紛うような広い屋内で、温度管理から収穫後の加工までが機械化されており、清潔な環境で効率的に木耳が生産されている。

李元總統は、担当者の説明にうなずきながら「農業も従来の方法にあぐらをかいているのではなく、常に革新を進めるべきだ」などと話された。

一時間ほどの視察を終え、一行は同県内の番路郷公田村「生力農場」での昼食会へ。ここはもう阿里山へ向かう中腹と言ってもよいほど。

窓からは雄大な阿里山の姿が、と思いきや霧に包まれてその姿は見えず。さすがに山の天気は変わりやすく、昼食の最中でも、太陽が顔を出したかと思えばすぐに雨が降り出すなど、落ち着かない天候であった。

李元総統を出迎えたレストランのオーナー夫妻は、総統在任中に一緒に撮影した写真を用意していた。「ぜひサインを」と依頼され、ご自身の座右の銘でもある「誠實自然」の文字を残された。

昼食は、さすが阿里山のお膝元らしく、阿里山烏龍茶の乾杯でスタート。ワラビや山蘇、地鶏など地元の特産がテーブルを飾った。

昼食後はメディアを前にミニ記者会見。嘉義県の農業などの印象について語った。特に茶葉に関しては、台北市

長時代に台北郊外の猫空の茶葉改革を進めたこともあって、知識や経験が豊富。同席した張県長も脱帽した様子であった。

午後は、台湾新幹線の嘉義駅にほど近い朴子市にある知恵遅れや障害を持つ子供たちのための施設「敏道家園」を訪問。二〇〇〇年、スイス人の神父によって設立された施設で、最大二百名の子供たちが全寮制で暮らせることになっているという。



台南・嘉義編の最後の視察先となる朴子市の養護施設「敏道家園」を訪問（5月18日）

そんな子供たちが、賛美歌の演奏で李元総統を歓迎。目を細めて聞き入っていた李元総統に、子供たちから訪問の記念として手作りのカップが贈られた。李元総統からは施設に対して寄付が贈られた。

館内を視察すると、ちょうど子供たちは「アフタヌーンティー」の時間。李元総統も「およばれ」して席に加わり、子供たちとの記念撮影となった。

これにて南部視察の行程は終了。一行は台湾新幹線の嘉義駅へ向かい、十六時九分の新幹線で台北へ戻られた。途中、台中駅からは曾文惠夫人が乗車。台中に住むお嬢さんのところへ一週間滞在した帰りだという。「いくら娘のところでも、何日もいるとやっぱ台北の自分の家へ帰りたくなるわ」と笑いながら話す夫人と合流し、総統もうれしそう。

十七時三十六分、台北駅に到着。三日間にわたった「台湾一周の旅」第二弾、台南・嘉義編は幕を下ろした。